

2011年 9月26日・毎日新聞「文化」欄では

精神の架橋 田中俊廣

ことばの森から 詩歌編〈7月～9月〉

たった一人に語りかける

前置きが長くなったが、太平洋戦争後、ことばの架橋を試みてきた山田かん（長崎市出身）の『山田かん全詩集』（コールサック社）が八月九日、長崎原爆の日に刊行された。山田は十四歳で被爆。二〇〇三年、七十二歳で亡くなるまで、原爆を中心に国家社会、生命の尊厳問題など追究し続けてきた。特筆すべきは、社会と自己に真摯に向き合い、葛藤の過程の中で、時が変容転生し、深い認識と思想にまで高められていったことである。例えば、「ぼくの頭蓋の暗みに懸けられた／スクリーンでは／人肉がまだ燃えつづけている」（「地点通過」）という、心身の傷痕の個人体験を原点に、「八月」では広島原爆やアウシュビッツへと人間の尊厳の重大さを普遍化していつている。

さらにこの全詩集は、福島原発事故という日本第三の広域被曝へも問いを投げかけている。

と紹介されています。